

左俣本流(一一:〇〇) ↓ 下降終

了(一二:一五)

中津川左俣

一九八六年八月三日

朝、和泉さん宅によってから出発。中津川林道に車を進めるが、林道の終点近くで、法面が崩壊して先に進めず、バックしてスペースのある所に駐車。その後、中津川に下降する。中津川左俣の合に行くと、すぐ滝があり、ゴルジュを形成している。滝の中には直登できないものもあるが、滝のすぐわきを木の枝を利用して登ることができる。ゴルジュを過ぎると、沢は明るくなる。そして沢の中は、倒木というより、伐採した時の残材が沢をうめつくして、歩きにくい。

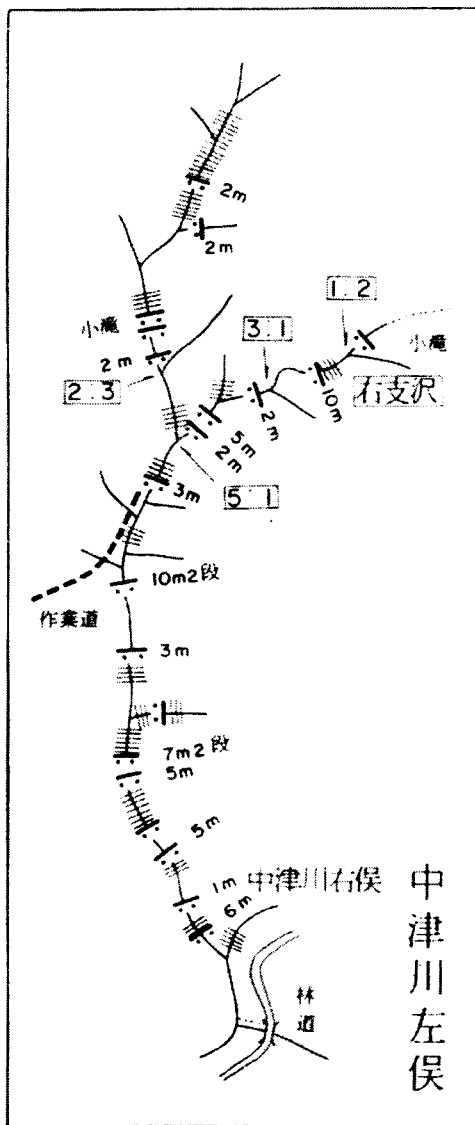
沢に入って約一時間。西さん達が下降に使った右支沢との分岐となる。見逃してしまいそうな小さな沢である。

さらに進むと二俣。右沢の方がい

くらから水量が多い。左沢へ歩を進める。

左沢に入ると、小滝がポツリ、ポツリとあるが、なんととっても、ナメ、ナメの連続である。いずれも花崗岩の風化したナメ床である。所々、流水の侵食作用により、花崗岩がトイ状にえぐられている箇所がある。

左沢に入って四〇分、傾斜もきつくなり、ヤブもかぶさってきた。源頭のようなのである。遡行終了として、



中津川左俣

引き返すことにする。

この沢は、中間点あたりまで伐採され、おまけに沢は木で埋まっており、歩きにくい沢であった。

焼枯沢

しき
一九八四年七月二一日

赤倉ノ沢に入る西・渡辺パーティと一緒に中津川林道ゲート手前まで行き、車をデポして、あとはひたすら林道を歩き続ける。二時間半かかって、やっと林道から解放される。

焼枯沢の出合は林道からは見えない。そこで、少し先に進んで、中津川がみおろせる所から下に降りて、沢を少し下降して、焼枯沢の出合に着く。

さて、ワラジを水にひたして履き、

(記・……)

「タイム」 左俣出合(九:二〇)↓右

沢分岐(一〇:一五)↓終了(一〇

・四五)

若林氏は一服ふかして、九時いよいよ遊行開始。

実はこの焼枯沢、うわさによると「なんもない」という評判で、若林氏と私は、「カスにはカスしかまわってこないのネ〜」などと、いじけていたのである。

アプローチばかり長くてカラだった(焼枯沢なんて、名前もあんまり良くない)では、ますます暗くなってしまうので、そこは三十路の迫力

コンビ、なんとか二重丸の三段滝あたりを出現させましょと、がんばって出発。

ところが、しょっぱなからクマの足跡と食跡らしきものを発見。この辺はクマやらカモシカやらが豊富だと聞いてはいたものの、さすがにこわくなり、ワアワア叫んだり、歌ったりしていったので、どうやらこの日の対面はまぬがれた。

さて、出合から五分位、右手にスラブが続く。しかし、川幅は二倍くらいなものだから迫力に欠ける。小滝二つが出てきて、その先は五〇倍くらいのちよつといいナメが続く。

「何だかこの先、ほんとに何も出てこないような感じだねえ」などと話しているうち、二筋の小滝を越えた先に七筋の階段状滝が出現。水ゴケですべるので、左側の水際を登る。